



岩田栄一



劉靜倩



宮川朋子

ダイアローグとしての小品展 起源イブ・第四夜

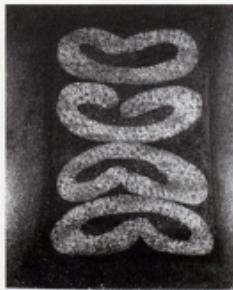
Part.1: 2000.5.22Mon.-6.3Sat.
Part.2: 2000.6.5Mon.-6.17Sat.

あらゆる美術作品は描く者と見る者、書く者と読む者によって成立する。すべては一個人の眼と手から発せられている。人は絶えず自分のいる「世界」を見ることと自律した「世界」を作ることとの間に揺れている。この、作品展示とディスカッション、批評文の提出からなる「起源イブ」という展覧会は、減退する批評精神に対する危機感をコアとしたコミュニケーションの場である。アートとは何か、自分がつくれているものあるいはつくろうとしているものは何か、という二つの問いの交差を起点とする議論の場である。

どのような表現であるにせよ、しばしば我々が、自分が考へていることについて考へるように、自己肯定的な批評性は表現行為に内在している。それが権威による表小路に陥り、難なく無に近づいた縮小感覚と、概念的抽象における領域の崩壊に因って生じる無限の大感覺を呼び起こしたとしても、その問いの抽象性と根底にある具体的な希求の問を行き来することでしか、表現行為は成立しない。

これまでの「起源イブ」で、参加者各々のモティベーションの差異は粗目浮き彫りとなった。直線的な文脈で「現代美術」を語れなくなったりのがすでに自明である現在、果たしてどのよう同一性においてそれが可能なのか。ジャンルを横断し、人と人を繋ぐ触媒であるということが、ディスカッション／ダイアローグとアートの共通項だとすると、あらゆる他のものを「1」対「1」に還元しつつ、その差異と同一性を明らかにすることによって立ち現れてくる何かこそが、「わたし」と「あなた」を「わたしたち」に向かって解き放つ。「出会う」とは一体どのような臨界点において可能なのだろうか。

ディスカッション
W3プロジェクト 高嶋晋一



山口隆志



橋本正太郎



水留周二



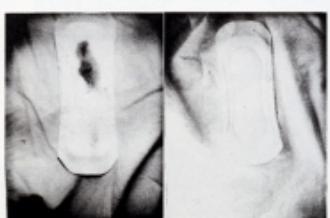
徳田智子



橋原章代



吉田浩



佐竹真由実



渡辺喜裕

あらゆる芸術活動と交流の源になるべく名付けられ、始められた【ダイアローグとしての小品展・起源イブ】は、今回で4回目となります。この企画は、美術大学生やアーティストが、【小品】を【グループ展示】し、それを背にして鑑賞者も交えて語り合い、【ディスカッション】することで、世代やジャンルを超えて、芸術に関わる人々の交流の場をつくり出すことを目的とし、作品や展示企画の斬新な展開を生み出していくのです。

【第四夜】では、学生が主体となり企画を立ち上げ、参加作家を募り、その世代は20-40代、活動地域は東京だけでなく、名古屋からも参加し、表現方法は平面・インスタレーション・パフォーマンス・映像・立体と多岐にわたります。

1. 現代世界の現況

現在の国家や企業を取巻く様々な問題は、従来の既立した制度やシステムでは解決しきれない規模と広がりを持ち、スピードと危機感を孕んでいます。

しかし、専門的に確立されている、それぞれの地域・ジャンル・職業は、自閉的な常習競争にやきになり、共通言語やコミュニケーションの場を失っていないでしょうか。乱立する小さな市場と狭い歴史的認識に支えられた、バーチャルな文化と商品の消費が、あらゆるオリジナリティが感じられない「イメージ」で飾着しながら、相手の顔さえ見ようとしない、差異と特権ばかりを主張する「齊合せの日常」を生み出しました。

私達の即時的、即物的な欲望が、自ら虚構の関係性被絆の恐怖を刷り込み、地域・ジャンル・職業を超えた、異世代間の縦のつながりや同世代間の横への突き抜けを諼る、身動きをとらないまま、漠然とした危機感・焦燥感におびえています。

2. 美術の現況

上記のような状況は、時代を先行・創造する水鏡たる現代美術にも、深刻な影響を与えています。日本という美術市場も美術批評も発展していない場の中で、捏造された流行による経済的波及効果という結果のみが、氾濫するコンペ・コンテスト・公募展において求められています。

そして、規制的美術史の中での自己正当化し、世界美術市場に対する傾向と対策で戦略的に乗り切ろうとする作家が増え、他ジャンルのイメージや技術を流用。その専門家から見ると、単なるまがい物としか見られない作品が増えました。結果、他ジャンルへの批評性・影響力・競争力を失い、知的実験性と社会性が減退してしまいました。

また、アーティストの自発的な発表と交流の場として発展した日本の貸し画廊制度は自閉的な温床と化し、美術大学においても、他の作品を批評したり、料を超えて、批評的意識を持った交流をすることがなくなりました。

しかし、美術の場とは、社会と密接に結びついた批評・制作の場だとすれば、アーティスト自身が作家・批評家・展覧会企画者・観客の分業を疑い、ジャンルを超えて新しい世界への批評性を含んだコンセプトや、作品の制作技術を輸出し返す、批評のダイナミズムが必要ではないでしょうか。

3. ダイアローグとしての小品展【起源イブ】の発足

1、2の現況を飲み込み、打開すべく、W3ダブリュー・キューブ・プロジェクトメンバー水畠廣二・北山理子・天野豊久提案のもと、1999年2月、【起源イブ】は始めされました。

なぜ、【ダイアローグ（対話）】か

今日、美術学校において、作品を前にして面々語り合うことは、ほとんどありません。同じでもうそうです。違う方どうだったならおさらです。

しかし、この企画に参入してみて世代やジャンルの違う人々の意見を聞きたり、自分の作品で説明したり、他の作品を批評することは、思ひもしなかった作品の良い所を見つけ出すことにつながり、制作や、与えられているだけの場を見直すきっかけになりました。

なぜ、【小品展】か

小品は、小さじだけでなく、作者の制作コンセプトや感性を、もっとも端的にあらわしていると言えます。加えて、場を変えての展示や、連続的な企画として交流をはかるため、グループ小品展という形をとりました。

4. 起源イブの歩み

第一夜：1999年2/1-2/13 ギャラリー・サージ

青木敦 天野豊久 梅澤洋一 高崎晋一 横本正太郎
水畠廣二 柳沢豊一 吉田浩 速辯喜裕

ディスカッションはそれぞれの表現への生な言葉が交わされ、「美術史と言う軸の欠如」、「美を表す作品・価値観を表す作品」、「作品が与えてくれるものを見出すもの」、「美術」と「教育・社会との関係」、「作家が表現の場作りや、展覧会を立てることの必要性」、「将来、作家としてやっていきたいいこいこうとしている/いるのか」などが、キーワードとして語られ特に、【イメージ表現】、「齊合せ」への「世代間の認識の差異」などがテーマとして、二夜に向かうこととなりました。また、この展覧会を引き金として、1999年5/1-5/22に、多摩美術大学において14名の学生が、料を越えて「作家の見える展覧会／模擬洗濯機」と銘打ち、展覧会と公開討論会を開催しました。



ディスカッション場面
(起源イブ第一夜)

第二夜：1999年6/7-6/12 6/14-6/19

ギャラリー・サージ
パート1 阿部真美 天野豊久 伊東直昭 猿谷公友 基島晋一
パート2 棚原卓作 出口道吉 橋本正太郎 水畠廣二 吉田浩

二夜は「イメージ表現」「齊合せ」などのキーワードにおいて事前に各自の作品のコンセプトや表現に由来するモチベーションをテキスト化・表明し、ディスカッションに臨みました。

しかし、【イメージ表現】への認識についての討議は、それぞれ「イメージ」という言葉の捉え方が異なったため、自他の解釈を改めて下さい。自分がどの段階から出る批評=自己反芻のない自己弁護と過激が感じる感想を言いつ合うだけで平行線をたどってしまったこと、会話を続ける意志と发言への賛成しない限りないことなどが挙げられました。ディスカッションの後、それぞれの作品について、いくつかの批評文が提示されました。

第三夜：1999年6/9-6/18 6/20-10/2

ギャラリー・サージ
パート1 伊藤直昭 渡辺健太郎 水畠廣二 速辯喜裕
パート2 阿部真美 天野豊久 徳田智子 橋本正太郎 吉田浩

第三夜は二夜の反省から1日目は他作品について自分の制作へ向かうと同じだわりながら語り(特に、別にできた所・真いと思った所)2日目に作者が反論・主張を繰り3日目そこから出たキーワードでまた作品に向きながら語るという形式をとりました。この方法から、他者のより広い、否応なしで反射や、自分の視点をも明かにし、「イメージ」というものへの認識の差異を浮かびあがらせ、より質の高い言語批評と作家活動へのフィード・バックをめざしました。

テーマとしては「美術におけるハード」と「ソフト」、「美術と国家・戦争・メディア・アートと消費主義」、「批評と感想の違い」、「現代の儀の儀」、「表現の足場や答え」、「美術における和解」、「作品に自分の社會性合わせるか」、「イメージ表現と決別し、まだ見ぬものを出すか」、他人が感動する能力は、作家の作品内の戲れ、「自分のイメージに因われて作品をセーブする必要がない、自分のやれてこなしたこと、やりたいことをやるのが作品を作ることだ」などなど、多岐に渡り議論がかわされました。

事後ミーティングにおいてそれぞれの作品についての批評文が提出され、これらの記述イブ、批評とは違うべきかが話し合われ、第四夜への提案がされました。特に、「批評と感想の違い」について議論し、批評が感想止まりになってしまったのは、作者はもう作りたかったと無責任に難題化するためであるとされました。作者のためを思って、「おもんぱって」発言し、自分がその作品にどういう感覚を見い出したかが研磨され、自分の視点を明にせず、自分の反駁のないまま、発言してしまう。そうすると、ディスカッションは表面的で他者に簡単に因調させたものや、教育的でも、道じて、判断力などだけのものとなって、底までいかないだろうとされました。そして、底層の差異を探り合うのではなくて、参加作家個別のアート觀や研究の姿勢や方向性について語り合う、お互いに作品を直面して何かを見い出すことから生まれる、世代・ジャンルを横断するような共通言語を創造していくことが必要だとされました。

また、起源イブ事務局が設置され、第四夜を2000年5/22-6/3・6/5-6/17まで、第五夜を10-11月に開催することが決まり、参加者を募ることとなりました。

(橋本正太郎)



水畠廣二
「Discussion」1999
(起源イブ第二夜出品作品)

以下は、「起源イブ」参加作家自身によって書き記された批評文です。作家の責任ある言語が、他者を評価し、各々の制作現場に還元するディスカッションの成果を、目に見える形で残したものです。

水畠さんの作品について。。。

(第三夜)

私にとって水畠さんの作品は、後を引くものでした。バツと見て差がれるといつよりも、ギャラリーを後にし、日常でフツと見えるといった感じです。薄い光、言葉にならない声、手を加えないまま人の肌の際、潤滑の配線、それらのものは、未完成ともからでないそなほほ、静けり気のないまゝ、ギャラリにて置き去りに、された様に思われました。

日常の中で「分らない、入りたくない、考えたくない、観たくない」などの肯定観念への懐いかけ。それは、対して拳を握り締め、声高に、疑問を投げかけるのではなく、じんわりと、静かに存在するだけ十分に、その意味を聞い掛けているものに近い様に思いました。

でも。。。その先の言葉は、今だ見出せません。それは、私自身へのいわれなかも知れません。同調という言葉を毛嫌う者の弱者の感覚を、痛みを、正面から受け止められない者の、いの理由にすぎないのかもしれません。

それでも、拭いれない疑惑がありります。「でも。。。しかし」と何をかくり返した後、水畠さんの「一言」を思い出しました。

「考る道具を、作りたい。」

正直な答など出せないからと、考えることを、あきらめた私にとって、水畠さんの作品(水畠さんという人物)は十分に、考えさせられるものでした。

池田智子



水篠周二
(discuss) 1999
(起源イブ第三夜出品作品)

天野豊久氏の作品 『Time of Rotterdam』

(第三夜)

天野氏の作品は彼自身の発信でロッタルダムからEメールによって届けられた。タイトルは『Time of Rotterdam』である。彼は現在オランダでの交換展に参加している。今や美術作品も電波に変換され瞬時に移動する時代を象徴するネーミングである。

作品は1枚の映像写真と同じく1枚の文字によるテキストを床にセッティングした物である。写真のほうはういすれも彼がオランダで撮影したと思われる色々の時計の写真である。時計はおそらく一瞬の象徴であろう。一瞬とひとつの長さを言ふのであるから。そしてそれはどのように存在するのであろうか。彼は一枚のシャッターで切り取った断面としての映像に動きを引き出している。映像を鳴らし音なしにはいの間に彼はオランダの精神で手を打ち続いている。繪はキホーに進化したもの。瞬と瞬を大いに世界の十分に再現するには至らなかった。従って彼の映像も分解写真の重ね合わせであるが、美しい絵画を描いている彼は無理に情説を出しをしている。それにしても彼は絵画を植しておるのであるから。美術の種の時代を知っている私は、きっと彼はパリソワーズがとても愛慕になる。變化力を一種を捉えるのは、余りにも朝顔幼稚である。さて、もう一方の絵文字によるテキストは、せっかちにオランダの私にこづへハードなチケットである。言葉が敏感でて解読せし得た時に作者の衝動と絶ごき出された表現の衝動がヤッチャされたのであるから。

いずれにしても、彼は人間にある運動的精神性の覚醒にターゲットを定めているのは、仕掛けの構造からも察し難いことがでる。今頃も彼は逆さま式庭園の構造をとっている。巡回式とは一点においては世界を体験できる場ではない。意識的に参加して歩一步。一瞬、瞬を繋ぎさせて、参加者は自分が知覚の再生と新生を体験しつつ時を経て、世界を再構築する場である。おそらく文字は歩いていく道であって飛びひであらう。鏡文字は記号から風景への先祖通りである。そして美しい映像写真は、発見を求める植物者の知覚と感觉が交差する特異点ということか。あらゆる景色がどうレーズの鏡の表面で反転して絶縁されるよう、意識と反応する時飛び逆転して結婚する。天野氏が仕組んだ巡回式庭園の入り口で、観客はドン・キホーテの槍を渡される。乱舞する時計の風景は、突然にびくともしない風車のある風景に匹敵するであろう。ただ庭園を愛する私のにとって、彼のシンプルな庭園が鏡庭のように見える。彼がロッタルダムで再発見した一瞬は、私はこの世界模様で免視することができた。

その結果作者の主張する強化された純粋性は、「状況の象徴」としてしか成立立っていないのではないか。個と個の力強、時間、背負っているプロトタイプや意図をはねることによって、観客に対するディスカッションの内容に対する安易な駆逐としてのメッセージはカケレモ。感情的ないい入れや作るの行為への想いが、むしろその支えをなくせば弱い的な營みや意図や策略性を意識がいいてしまう。

「ともに話に入る状況はないと、少し魔美でおこなったディスカッション込みの講演会の時など、一夜、二夜のうちに言われたことだ。本当に純化と純粹化の名の下に人権を国際的にはござり、純潔性と、極めやかな象徴性を繋持することにより、生来持つて作家や観客の「イメージ」の抜け皮をはぎとり、独立した作品やディスカッションは自立した発言として聴衆の耳に到達できるのか。

橋本正太郎

高嶋晋一
「ドローイング」1999
(起源イブ第二夜出品作品)

高嶋晋一さんの作品への橋本正太郎による批評文 (第二夜)

下の段の作品は、家族と共に吉野や修学旅行の草原のはじに育っている誰か分からぬ人、それは作者によって深刻の役割として用意された。しかし墨子のような、しかも虹大きさのあるテレビの雨の現実正体の人間となる。

生きしいはずの里の里や思い入れる上部の作品はその残酷を書かせるがくることでいろいろな角眼を見ることが出来る。それを共有感は代わりに力アシ感やローファイ感に変えられていたらう。性的な恋愛も同様だ。そして上部の草原は、現実として用意された。しかし墨子のような、虹はいろいろな距離感を表現したところが、その表現そのものにも距離感をとろうとする済満的な出家者としての彼が存在する。しかしそのままの現出は済満地の心の対象を行なっていた所が、現実感を求めるランダムの主人公の大筋だ。その苦悶が、私の世界と公の強烈力に生まれる人々を客觀的位置へ持っていくだろうか。

提出された文章でわるい自分とどうい人間なのか。他人とはどうい人間なのか。

そこへの新定できたいと思う自己への具体的な考察がイメージの可能性を強めか。不可能性を言及していくのか。それとも深い危機感と期待感を維持するのだろうか。

橋本正太郎

水畠周二さんの作品についての橋本正太郎の批評文
(第二夜)

一度目にした時、産業的な装置やシステムに捲入されるながらも冬のハーレム街にたむろする不良たち、その声、怒りタバコのアカリを思い浮かべた。彼等は革命を起こすために集めた現代現在のイビ達どうら。彼ら、革新的、革命的書籍を書き取られ、読みはされた後の後身の櫻庭達は、過去数多のミスカッション参加者に見られてはいるとしても、作者の行為によつて無名なされ人格をはぎとられたモノノイズ・ヒカリと分離して行動するよう見えてしまう。

その結果作者の主張する強化された純粋性は、「状況の象徴」としてしか成立立っていないのではないか。個と個の力強、時間、背負っているプロトタイプや意図をはねることによって、観客に対するディスカッションの内容に対する安易な駆逐としてのメッセージはカケレモ。感情的ないい入れや作るの行為への想いが、むしろその支えをなくせば弱い的な營みや意図や策略性を意識がいいてしまう。

「ともに話に入る状況はないと、少し魔美でおこなったディスカッション込みの講演会の時など、一夜、二夜のうちに言われたことだ。本当に純化と純粹化の名の下に人権を国際的にはござり、純潔性と、極めやかな象徴性を繋持することにより、生来持つて作家や観客の「イメージ」の抜け皮をはぎとり、独立した作品やディスカッションは自立した発言として聴衆の耳に到達できるのか。

橋本正太郎

起源イブイーストカレッジの状況
日本におりおきるミスカッションの形である。

「世界」――という言葉の新しい意味の新規性にはじまり、「壁」と「壁」、通じ、通じ、通じ、「壁」（アーティスト）――高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで? その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、彼らのこの段階で世界にからむ壁――心壁があつたじこないアート――いつのまにか外に荷物を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋本・高嶋・吉野・吉田・直哉（東京アーティスト）

天野 壁ならぬ、吉野のこの壁で壁で世界を感じたのはなんで?

その壁を運んでいたるじこないで、自分の壁で世界を運んでいたるじこないとか、壁をなしてはいるじこないないつらう様だ。たまはほんとにどこに運んでいたるじこないで、壁の内側で心の壁をもつてゐてしまう。

橋

第四夜参加作家プロフィール・コメント

Part.1

佐竹真由実 /Mayumi Satake 女
1978年 (SS53.4.13生) 22才
1999.12 Club Plastic 展示 (看護婦)
2000. 2月 Club Plastic 展示 (看護婦人科医)
2000. 3月 Club Shelter パフォーマンス 「水虫狂の官能旅行」
性的欲望ニヨッテワタシチハ 支配サレル。ソレユニエ 人格マデ
モガ 前原 シテコロ
リタシタチハエニコロ 相本の象徴アリノノ 豪傑トナッテ
存在スル。 ダレモ止メル事ノデキナイ 人情交代ニヨル
変形。 欲望ニ对スル性的エネルギー放出
スペベ支配サレ無トナリ死ス
人情ハタダシ 生殖者ニ スギナイ 本能ノ ママニ エロスク死ス

椿原章代 /Akiyo Tsubakihara

1987年より作品発表。身体的な「こと」についての思考と、文字や記号的なものとの作品の関係について探求する。

90年代よりOST-ORGAN参加。96「平または3.2.1.」ART SPACE GARELLY.97「Installation on Installation」同上、「履帯しのゆくよー現代美術のボジョレ1997」名古屋市美術館、99「corner the art」名古屋芸術大学EBe「garden・garden」名古屋鹿20号倉庫「3号倉庫における複数作品シリーズ」「大顎展」名古屋市科学館など。

水留周二 /Syuju Mizutome

1950年新潟県生まれ

ディスカッションとは、cuss(嘆い)を解く一つの解体作業である。嘆いは、行き場のない精神の奥底から湧いてくる。かつてアートは、上座に位置して迷ひ求められたものにビジョンを放散する力を發揮していた。しかし今、溢れる嘆いの中アートの面白は何も見えない。各々が双方向性を原理とするディスカッションの場で、互いに足枷の妥協を限りなく充実に肉声へと変換する。交錯する肉声が論理を引き寄せせる時、それは共通の突破口となる。ディスカッションの原理は、アートを抽象から脱皮させる。

吉田浩 /Hiroshi Yoshida

1997.4 多摩美術大学入学

1999 「グループ展『ダイアローグ』としての小品展」起源イブ・第一夜」同「第二夜」
「第三夜」ギャラリー・サージ(東京・神田)、「グループ展『模型洗濯機』多摩美術大学内ギャラリー(東京・八王子)

主なコンセプト：断片

大きめな物の中で何からかの要因による副産物として発生し、漏在し、消えてゆく。そして何らかの様を詰び、知覚させ感覚として残してゆくモノ。それゆえ再認識しなければ、何の意味も詰ばない。ただ消えて行くばかりである。

劉 妤倩 /LIU, YU-CHIEN

1976.11.5台湾(台北)生まれ。

現在、多摩美術大学4年

私は、生と死、感情、記憶、光と空間、闇、喪失、一瞬と永遠、をイメージし、立体と平面の作品を組み合わせてきました。
自分にとって、作品は説明するものじゃない。
それはあらゆる神話に含まれるものと同様、日常世界の小さな現実を超えるメッセージを見している。

ディスカッション /Discussion 19 : 00-21 : 00

22	23	24	25	26	27
29	30	31	1	2	3
5	6	7	8	9	10
12	13	14	15	16	17

・どなたでも参加できます。

オープニングパーティー

Part.1 / 5.22Mon. 18:00-
Part.2 / 6.5Mon. 18:00-

Part.2

岩田栄一 /Eiichi Iwata

1973年横浜生まれ
1999年「テーブルマニアードーナツ展」ワタリクム美術館 オンサンデーズ(東京)、「アンソロジイ」canadian(名古屋)他個展会多数。現在、アートスペース「dot」運営、管理に参加。
とりあえず、疑問が二つあります。一つは、夜になつて自分の家を、他人の家と間違えて見分けるのはなぜか、二つ目は、「何から殺し」と実際に利用可能な世の中とは、何ですか。そして想をくぐして考えている中で、病人のように困窮状態を無視してもいいような気がします。また表現については、言葉や構造と、その目的が異なる、気がするから。

鶴田智子 /Tomoko Tokuda

人を描きたいと思う私の漠はかな想いは、日々の生活中で、簡単に流されてしまがちです。

しかし、それ以上のヒントが日常の中で用意されていると思います。
私は、それを受け取り、私という道具を使って、人を表現したいと考えます。

橋本正太郎 /Syoutarou Hashimoto

1978年、東京生まれ。多摩美術大学在学中。
1999年 グループ展「ダイアローグ」としての小品展「起源イブ・第一夜」同「第二夜」
「第三夜」ギャラリー・サージ(東京・神田)、「グループ展『模型洗濯機』多摩美術大学内ギャラリー(東京・八王子)。「小西博仁×橋本正太郎」甜酸苦甘画廊(東京・麹町)

正しさを過ぎない後ろめたさに勝つ。

愛している。信じている。気にしている。

恵まない。広げたい。気付いたい。同じになりたい。

君と僕の美しさを、表す。過ぶ。見る。撞る。見せる。

幸せに死にたい。

宮川朋子 /Tomoko Miyagawa

1977年生まれ

詩集「夜のパラデオ」「横円の櫻」「フィルムの真っ黒」

詩と絵画の融合による新たな風景を覗すべく奮闘中。

「空は青い」マドに霧がつく「街灯／車／遠くの台所／光」いう光は直系広く
／にじ／秘密の宝箱の／紫の轟のよう／安く巻く／おまえを巻こうとわたしは／
私の冷たい顔をつける」

詩集「横円の櫻」

山口隆志 /Takashi Yamaguchi

1969年、鹿児島県生まれ 1995年 東京芸術大学松田画科専攻卒業
個展、グループ展多数。

私の作品は、主に自然や生命を題材としている。油絵の具を使った平面作品であり、抽象的空間を創造している。触感的空间は、三点消失法や、陰影による墨の表現等といったいわゆる西洋空間透视法を否定して、点線またはマチルによってできる層の重なりによって、空間を知覚表現し表現していく考え方である。私の作品に出てくる妙な形体は、例へばある形体をもつ木を、枯山水の中に設置すると、その木が生命を持ち、枝や葉に変身するといった日本人独特の感覚や、頭の取り方をビントに、私の内面から出でてくる、直感的で、抽象的な形体をこの触感的空间の中に設置する事によって、より独自な世界が表せられるのである。

渡辺喜裕 /Yoshihiro Watanabe

1976.4.8生まれ W³プロジェクトメンバー 起源イブ第一夜、第三夜参加

現在、多摩美術大学在学中

1999、個展「plant」ギャラリー・サージ(東京・神田)

学生グループ展示「ディスカッション展『模型洗濯機』企画・出品

「Leslie Bock+Jos van der Pol 講演会」主催 (多摩美術大学) 他

自分を取り戻す状況を、また販じて見ないこと。良いことも悪いことも。

企画・制作 W³ Project /ダブリュー・キューブ・プロジェクト

GALLERY SURGE

101-0032 東京都千代田区日本橋三丁目7-13 港建ビル1F
TEL.03-3860-2568 FAX.03-3861-2582
27-13,Ishamoto-cho,Chiyoda-ku,TOKYO 101-0032

URL: <http://www.catnet.ne.jp/surge/>
e-mail:surge@catnet.ne.jp

起源イブ 事務局

〒192-0373 千葉県柏市柏木1035 柏美芸208
TEL/FAX. 0426-77-9905
kemi-sou208,Kamiyagi-2035,Hachioji-shi,TOKYO 192-0373

E-mail : way@mx4.ttcne.jp



・起源イブ第五夜 参加者募集のお知らせ：現在、次回起源イブ・第五夜の開催を、今年度中に予定しています。

詳しくは、起源イブ事務局まで御連絡下さい。